

おわりに



本書の目的は、ソ連時代を生きた人々がソ連崩壊後に独立国家として生まれ変わった生活の中でソ連時代をどのように記憶しているのか、彼らがどのようなことを経験してきたかを記録することであった。本書では、人々の記憶を主な分析の対象としているが、そのような記憶が客観的なものであり、また歴史について最終的な結論を出せるものと定義しているわけではない。歴史を再考する際に、この記憶について慎重な姿勢で扱わなければならない点については、本書でも十分に配慮してきた。あるロシアの哲学者の言葉にもあるように、「現象と本質としての記憶は単純ではなく矛盾が多い、非常に複雑なものである。記憶は、裏切ることも騙すこともできる」¹⁾。

その一例はノスタルジーを感じ、毎年の物価の切り下げと秩序を懐かしがるソ連時代の支持者と、現在の新しい経済や社会状況の下で社会的に恵まれた地位を得、ソ連時代の否定的な部分のみを強調する者がいることに象徴されよう。そういった意味では、記憶は特別な注意を要するものである。過去を過剰に美化し、過去にノスタルジーを感じながら生きることは今の自分を否定することになるように、過去を拒否し、今の自分を過去から切り離して生きることは、社会が独自性を失うことにつながる²⁾。

これまでの旧ソ連中央アジア地域に関する歴史研究は、主に文献史料を中心に構成されており、人々の声や彼らが経験してきたことは無視されることが多かった。しかし、時代の政治的なイデオロギーを多く反映する歴史資料に、人々

1) Valentin Tolstykh. *My byli : Sovetskij chelovek kak on est'*. Moskva : Kul'turnaia Revolutsiia. 2008. 13頁参照。

2) 類似の考え方については、Valentin Tolstykh. *My byli : Sovetskij chelovek kak on est'*. Moskva : Kul'turnaia Revolutsiia. 2008. 18頁参照。

の経験に関する記憶を加えて検討することで、時代と様々な出来事を初めて説明することができるようになるのではないだろうか。本書では、そのような人々の記憶を提供することで、ソ連時代の複雑さをより客観的に理解できるようになることへの貢献を目指した。

そのような「記憶の中のソ連」を、ウズベキスタンの近代史、スターリン時代、第二次世界大戦、スターリン亡き後の時代、「黄金の時代」といわれた1970-80年代、人々のソ連時代のコミュニティ観、イスラーム観、民族観やソ連崩壊に対するノスタルジーに関する十の章を通して述べてきた。冒頭でも述べた通り、これらの記憶は、多くの人々（特に高齢者）に対するインタビューに基づいている。その目的は、彼らが生きた時代のエピソードや記憶に残ったことを通して、彼らが生きた時代をとらえなおすことであった。

本書における主な研究材料となったインタビューを進める中で明らかになったのは、人々は何を大切に思うのか、人々はどのような価値観を持っているのか、ということである。例えば、イデオロギーに影響を受けた2種類の歴史が現れている。どういうことかということ、革命前は人々は自分たちの伝統を大事にしていた。しかし、ソ連時代になると、「昔は悪く、ソ連時代が良い」という考え方がプロパガンダとして人々の間に広まった。ソ連時代の中でもいくつかの時代があり、指導者が変わると同時に前の指導者を悪く言うのが一般的な傾向であった。さらに独立が達成されると、ソ連はすべて誤りであり、独立こそが人々を解放したのだ、というのが新しい政権の歴史観、政府関係者の言い分になった。このような状況において、政治家の解釈に基づいた歴史ではなく、出来事そのものを重視した歴史を構築しえるかということ、それは非常に難しい。なぜなら、それらは政治的に大変操作されやすく、最終的に今後50年、60年経ってから、今の時代、前の時代が何であったのかわからなくなることも懸念されるからである。

そうした中で、多くの人々は本書で述べられた話を家庭内のみでしており、それを外部に出すことはなかった。彼らはそのような（歴史やイデオロギーといった）政治的にセンシティブな話を「台所話」とよんでいた。その理由には、政治は料理であり、台所の話をしないと中身（つまり政治）がわからないという見方があったからである。実際、そのような話は台所で行われていた。なぜ台

所が安全なのかは不明だが、そのような傾向は今の中央アジア、例えばウズベキスタンにも引き継がれている。つまり、時代が変わっても人々の政治観や意識は変わらないというのが現状である。

本書の主目的は日常生活の出来事から時代を記録することだが、政治的な出来事と人々の姿勢は必ずしも一致しないことが明らかとなった。例えば、本書にもあったように、スターリン時代をどのように覚えているかという点、「物がだんだん安くなっていった時期」で、物価は4月と10月に必ず安くなったという。現在はこれとは正反対で、4月と10月に物価は上がる。インタビューでは、「当時は物を買わずに4月まで待った」、「10月まで待った」という人が多かった。

また、スターリンが死んだ時の出来事については、「皆が泣いていた」という。ある人はまだ子どもだったが、「なぜ皆が泣いているのかわからず、とにかく皆が泣いているから自分も泣いた」と語っている。また子どもたちにとってのスターリンは、亡くなる前も後も「写真」に過ぎなかった。「スターリンが死んだ」と伝えられた時、子どもたちは写真がどのように死ぬのかわからなかったのだという。壁にはいつもスターリンとレーニンの写真が貼られていたため、毎日のようにそれをみていた子どもたちはその写真がスターリンだと理解していたという。

フルシチョフ時代に関しては、例えば人々は、「パンがなくなった」と語っている。共産党執行部におけるフルシチョフの最大のミスは、国民に食糧が行き渡らず、国民の不満が高まったことだと言われており、人々の証言にも「パンや食料品が一気になくなった」というものがみられる。

また、ソ連時代の宗教政策や民族政策を批判する人も多く、非常に複雑な構造がみられる。その一方で、多民族共存の政策、つまり多様な民族の人たちが同じところに共存するという政策を支持する人も多く、自分たちだけの国を望むという人たちはいなかった。ただし、ソ連の中でもっとも不満だったことを聞けば必ず三つの答えが返ってくる。それは、宗教の自由が制限されたこと、民族の伝統の自由が制限されたこと、そして政治的参加の自由がなかったことである。また、ウズベキスタンにおいては、綿花生産が「国を悪くした」、「自分たちの生活に影響した」という声も聞かれた。

コミュニティについて、マハッラのような近隣コミュニティは一体何だった

のかというと、多くの人は、それをコミュニティとよぶのは誤りだと言う。彼らによれば、各地域にあった地域社会はあくまでも拡大家族のような仕組みであり、それが現代になってコミュニティとなった。拡大家族という認識がソ連時代を通してしだいに薄れ、それが現在のコミュニティになってしまったというのが彼らの主張である。

最後に、ソ連時代に関する意外な回答例を挙げる。ソ連時代は「まあまあ良かった」といった控えめな回答が多いが、それはある意味ではノスタルジーの現れでもある。国民がソ連時代にノスタルジーを抱く理由は、主に二つ挙げられる。一つは、過去に対するノスタルジーがウズベキスタンのみならず、どこの国の人にも共通するものであることである。それは、自分がまだ若く様々なことに挑戦していた時代に戻りたい、という気持ちから生じると思われる。

二つ目には、旧ソ連を構成していたウズベキスタン（とその他の共和国）の人々が持つ特殊性である。すなわち、自分たちがこれまで経験してきた出来事、政治体制、社会などに関する感情に基づいた懐かしさである。間接的ではあるものの、そのような懐かしさは単に過去に対する憧れだけでなく、現在の生活に対する不満も物語っている。彼らの多くは自分たちの現時点での生活や経済・社会状況の観点から当時を思い出し、ノスタルジーを感じ、ソ連時代を非常に高く評価する。具体的には、ソ連的な価値観、社会制度、生活の安定感、人々の仕事やお互いに対する関係にみられた規律、高水準の労働や教育、そしてソ連の一部を構成しているという誇りがその理由としてよく挙げられる。これらが人々の中にいまだに残るソ連時代の魅力とこの時代に対する愛着の要因となっている。

このような中で、現在の、例えばウズベキスタンが陥った状況の責任は誰にあるのかという点については、ソ連幹部やロシア人ではなく、彼らの言いなりになって命令を実行した「われわれ」、つまりウズベキスタンの人々にある、という人がいたことは興味深い。これは非常に珍しいことだと考えられる。かつて、このような質問をすると、あくまでも「ロシア人やソ連幹部の責任だ」とする回答が多かったからである。このことは、人々の考え方がある程度変化してきていることを物語っているのではないだろうか。